

【助成 40-68】

移民第二世代のオートエスノグラフィー

研究代表者 早稲田大学人間科学学術院 教授 樋口直人
研究分担者 長崎大学多文化社会学部 准教授 南誠
桃山学院教育大学人間教育学部 准教授 オチャンテ・村井・メルセデス・ロサ
LEC 会計大学院大学准教授 劉昊
奈良学園大学人間教育学部 講師 オチャンテ・カルロス
中部大学人文学部 助教 王昊凡
東京都立大学国際センター 特任助教 ラファエラ・オリバレス・ヨシイ
獨協大学 非常勤講師 小波津ホセ
明治学院大学 非常勤講師 白皓
大阪大学大学院人間科学研究科博士課程 大川ヘナン
一橋大学大学院社会学研究科博士課程 山崎哲

〔研究の概要〕

本研究の目的は、移民第二世代の研究者が自らの経験を分析する、「オートエスノグラフィー」という手法を用いて、次の2点に取り組むことにある。(1)マジョリティの研究者が問うてこなかった論点を自らの経験をもとに提示し、従来の研究とは異なる問題設定と知見を導き出す。(2)第二世代自身の執筆による論文集を刊行し、移民は研究対象であるのみならず、研究主体でもあることを可視化する。そのため、研究代表者以外は中国系 5 名、ラテン系 5 名の移民第二世代研究者で研究組織を形成し、アイデンティティ・クライシス、パスポート、進学、同胞社会との軋轢、出自の隠蔽、宗教、次世代への文化継承、帰属意識、ネットワークといったテーマで自己分析を行った。

〔研究経過および成果〕

オートエスノグラフィーという手法は、日本で導入されるようになってから 5 年程度しか経過しておらず、日本語での先行研究は決定的に不足している。そのため、まず英語を主とした文献購読と検討会、実際にオートエスノグラフィーを書いた経験のある外部講師を招聘して討議するといった形で進めていった。それをもとに各自が分析するテーマを決めて、自己の経験を思い出し資料を集めて文脈も含めて再現した。

これを論文の形にまとめていく際に、口頭報告の場を何度も設定して論点を整理し、質疑をもとに修正する手続きをとることとした。そのため、まず 2023 年 1 月に早稲田大学でシンポジウムを開催し、代表者と分担者全員が報告した。次に、6月の AAS-in-Asia 会議で大川、山崎、ヨシイが報告した。また、7月の ASCJ 会議でオチャンテ・ロサ、大川、山崎が報告した。最後に、2024 年 2 月に長崎大学でシンポジウムを開催し、王、オチャンテ・カルロス、ヨシイが報告した。

こうした過程を経て、テーマを変更・微調整しつつ以下のようなテーマで書き進めることになった。「生活世界」(南)、「アイデンティティ・クライシス」(白)、「同胞の裏切り」(劉)、「出自の隠蔽」(山崎)、オチャンテ「世代間の文化継承」(オチャンテ・カルロス)、「宗教的アイデンティティの継承」(オチャンテ・ロサ)、「日系の再構築と帰属意識」(小波津)、「移民二世における継承語の役割」(ヨシイ)、「大学進学」(大川)。

本研究の目標は、移民第二世代を書き手とするオートエスノグラフィーの論集を刊行し、「書き手としての移民第二世代」を可視化することにあつた。その目標に向けては着実に進んできたが、それ以外に4つの点で当初予想していなかった知見が得られた。

第一に、ほぼ全員のメンバーが自らの「痛み」を取り上げ、かつ3分の2くらいが痛みを主題としている。マイノリティ性を持つ者がオートエスノグラフィーを書くときには、マイノリティ性ゆえに経験した痛みを言語化することの必要性を示している。これは、婚活や就職支援といった形で近年刊行されている日本人のオートエスノグラフィーにはない特徴で、それが最終的な成果のインパクトを高めるものと思われる。

第二に、一般に進学率が高くモデル・マイノリティと言われる中国系の第二世代の方が、痛みを伴う悩みを主題として取り上げていた。ラテン系の場合、実存的な問題よりは生活苦や進学の困難といった経済的問題が背景にあるため、痛みの性質が異なる。ラテン系のメンバーが、中国系の人は何でそんなに悩むのかと驚いていたのが、印象的であった。中国系第二世代の問題は、これまで見

逃されてきた傾向が強くあるため、その意味でも当初の予想以上の知見が得られたと評価している。

第三に、こうした知見を受けて、代表者の樋口が担当する序章も、オートエスノグラフィーの一般的なレビューを書く方針から変更した。すなわち、こうした第二世代の痛みは従来の研究が看過してきた論点であり、問われなかった経験を分析して言語化する「サバルタン・オートエスノグラフィー」としての意義を強調する必要がある。

第四に、討議の過程で生じた課題として、経験を言語化する際に必要な概念の問題がある。オートエスノグラフィーを単なる個人的経験の語りで済ませず、個々の経験の普遍性を言語化するには、社会理論や社会哲学の概念を援用する必要がある。具体的には、ベンヤミンの想起、ゴフマンのカバーリング、シュミットの主権、ルーマンのシステム分化と適応といったアイデアが出されている。こうした古典の思考を援用することで、議論に普遍性と深みを与えてオートエスノグラフィーの可能性を最大限に提示することが、最終的な成果刊行に向けた課題となる。

[発表論文]

1. 南誠「オートエスノグラフィの実践と中国帰国者のアイデンティティの問い——個人史研究の可能性をめぐって」『日中社会学研究』30号、2023年
2. 大川ヘナン「『当事者』と『研究者』の関係を問い直す——移動する『私』のオートエスノグラフィーを手がかりに」『異文化間教育』57号、2023年。
3. 劉昊「“移民創造的場所”的小叙事——基于自我民族志的论述」『国際社会科学』40卷3号、2023年。